

むちむちおもちゃ！



ていたーにあ



メリツメリイツ

「んひひ……子宮口…拡がってるぅ…っ」

ブシュッ！ブシュウウウウッ！

「はぁ…っ…んっ…また産まれたぁ……」

ピクン！ピクン！

「うひ…いっ……いぐぅ…出産でイグううぅ…っ」



「グヒヒ、産まれた産まれた」

「これで何人目ダ？」

「もう数えるのも面倒になっちまった。何十人かは産んだんじゃねえかな」

「じゃあもうこいつは要らないな。蟲の餌にでもするか」



ゴリッゴリッ…ガジガジ…

「おっぱい…イイよお…んん…っ…もっと齧ってえ…」  
母乳を求め乳の中に潜り込んだ触手が内側に齧りつく

ゴプッ…ゴキュゴキュ…

「んひひ…たくさん飲んでるう…あは…ああん…」  
ビクッ ビクン

貴族の息子達におもちゃとして与えられたユーディット







チクッ! スプズプッ

「な、なにをするつもり!?!」

「おばさんのおっぱいをもっと大きくしてあげるんだよ♪」

「すぐに大きくなるからね!」

「嫌あ…やめ…っ…やめなさい!」

「ほら、こんなに大きくなっちゃった♪」

「うう……う、ぐう……っ」

「じゃあ早速このおっぱいで遊ぼうかな！」







後ろからしがみつき、乳首を思い切り掴む

「んひいいい！　ち、乳首いいいッ！！」

「すげーでかおっぱい！」

乳を上下左右にこね回し、引っ張り、強く押しこむ



ブシュ、ブシュウウウウ!!!

「んひいいいい! で、でりゅッ、おっぱいでりゅうううッ!!!」

「全部出し切るの手伝ってあげるよ♪」

ぎゅっ、ぎゅっ

「ち、ちくび、しこしこしないれえええ…また…また…でりゅううッ、あっ、ああっ!!!」



「んほおおおお、お乳いい…」

「今度はおっぱい吸ってあげるね♪」

男達の命令に従い、尻を向ける

「でかいケツだなおい！匂いもすげえぞ！」

「クンクン しめったふんどしからイヤらしい匂いがしてるぜえ」

「(やめろお…そんなところを……)」

「おら、ケツにザーメンぶっかけてくださいって言うんだよ」

「そ、そんなこと言えるかっ！」

「お姫様がどうなってもいいのかな？親衛隊長さん」

「くっ…！ わ…私のでかいケツに…ザーメンぶっかけてください…」





「いただきまあーす♪」

ガブッ!! ガブッ!!

「んぎiiiiiiiiiiiッ!!! 痛`い` iiiiii!!!」

ビクンッ! ビクンッ!



ブシューウウウ！！

ゴキュ、ゴキュ…モグ、モグ

母乳を搾り取るようにギチギチと噛み締める

「ぷはっ、おばさんのおっぱい美味しいよ♪」



「あへえええ、おっぱい…じんじんしゅりゅううう……」

「おっぱい嘸まれてイクなんて、おばさん変態だね♪」

「これからもっとイイことしてあげるね」

「痛い…気持ちいいれしゅうう……うひッ……」

見せ物としてゴブリンに犯されるメルチェリーダ

ゲヘ…グヒヒ…

ジュブ、ジュブ







ビュ、ビュルルッ！

「こんなもんなの？ 全然よくないわ…！」

「ゴブリンはまだまだ居ますからね。存分に孕んでください、国王陛下」

「うう……こ、こんなに…」

大量のゴブリンに中出しされ、下腹部が膨れている

「すぐ産まれてきますから、次は出産ショーですね」





「はあ…はあ…っ…あっ…あはああ…」

「そろそろ生まれそうですなあ」

「いひっ…ツ、あっ、はひいい……  
でる…赤ちゃんでるうううう…っ！！」



ブシュッ…ミチミチミチッ…!!!

「んぎいいいいいい!!! あがひゃん、あがひゃんでりゅ…ッ!!!

お〇んこっ…ごりゅごりゅしてるうううう!!!」

ブシューウウウウウッ!!!

「ィグッ!! 産みながらィグウウウウ!!!」

「フゴッ!?……ぶひっ、ぶひいいい!!」  
ビュル、ビュルルルッ!!  
貴族達の前でだらしなく舌を出しイキまくるメルチェリーダ  
「んほおおお…ッ…み、みられへりゅ…  
フゴッ…ぶた鼻でイってるのみられてりゅううう!!」





「はあ…はあ…っ…あ、あはああ……」

「すっかり奴隷になりましたなあ、陛下」

「今日も面白いものを見せてくれるんだろう？」

「ええ、とびきりのを、ね」



ビュル、ビュルルルッ!!

男達が尻に向け射精する

「このケツたまんねー！」

「(お尻…熱いい……でも…姫様のため…これくらい……)」



ポコオッ！！ ミリミリミリッ！！

「んひいいいい！ おっ、お〇んこ入ってりゅううう！」

「子宮口…拡げないれえええ！ うひっ、イグウウウッ！！」





「んぎいいいいいいいいッ！！！」

ボコオッ！！

「きちや…ったあ、ああ…あっ、あはああああ…ッ…んひひ…っ…」

モゾ、モゾ

「おほおおおおっ……いい…お、お腹あああ、きもひいいいい…」



「まだまだ見せ物として使わせてもらいますよ？陛下」

「は……ひっ…はひい……あはああ…」

「いい格好だな。ま〇こが丸見えだぜ？親衛隊長さんよ」

「み、見るな！ くそっ、お前らなんて剣があれば…」

「フッ…いつまでそんな事が言えるかな？」





メリメリッ

「うっ…ぐう…っ」

ズブズブッ

「処女ま〇こキツキツだぜ！」

「い…いやあ……た、たのむ…抜いて…くれ…っ！」

「何言ってやがんだ、ずいぶん感じてるじゃねえか！」

「おら、そろそろ処女ま〇こに出してやるぜ!？」



ビュルルル！！

「んひいいっ！」

ビクッ ビクン

「(おほおおおお…中に…出されたあ…

うひっ…こんな奴らにいいイ…ツ)」

「全員出すまで終わらねえからな。覚悟しておけよ？」

下衆な男達に輪姦され孕まされるのであった——。

「グヒヒ、こっちのメイドはムチムチだナ」

「いやあ、放して！ やめてください…！」

オークは容赦なく叩きつける

ズポッ！ズポッ！

「(お、オークのお〇んぼ…奥まで来てる…んっ…)」



ビュウウウウッ!!!

「(んああ…びゅーびゅー出されへる…あ、あかひやんできひやうう…)」

ブシュ ブシュウウ!!

「このメイド母乳噴いてイってるぜ!」



「こいつは使えそうだな」

「持って帰って家畜にするか」



オークの出産用家畜として持ち帰られたエフィ

「はあ…はあ……」

「そろそろ生まれそうだナ」